

研究ノート

上田貞次郎の第二回英国留学体験の
成果に関する一考察

源 昌 久

I 序

本稿は、明治・大正・昭和にかけて経済学の諸分野で活躍した上田貞次郎（1879-1940）の第二回英国留学（1913年9月-1914年12月）が彼の経済思想（思考）形成にいかなる影響を与えたかを解明するための素材を提供するひとつの試みである。

筆者は、これまで地理学史上におけるノン・アカデミック地理学者ないし研究者を対象として検討を加えてきた。その際、英国のある地理学者の著作が日本に導入され、伝播していくプロセスを分析したことがある¹⁾。今回、経済学者である上田の第二回目の英国留学を取り上げることは、その過程が前述の英国と日本との学問交流史の検討作業の延長線上に位置すると思えたからである。

本発表は、今後の本格的な研究のための予備的作業であり、中間報告である。資料調査にあたり、時間の制約、利用上の制限等により、原資料（一次文献）にあたることができなかったケースが生じた。例えば、筆者は一橋大学学園史資料室を訪問し、当室蔵の「上田貞次郎宛て書簡」を調査しえなかった。また、翻訳書・二次的情報（再録文献）と原書・原典とを比較・

照合する作業を省略したことがある。これらの点は次回に作業を実行・修正したい。

II 『上田貞次郎日記 明治三十八年-大正七年』のトレース

1. 第2回英国留学

上田は、海外に数度、渡航している。その内、留学を目的にしての渡航は二回ある。第一回目は、1905（明治38）年10月（出発）から1909（明治42）年帰国までの期間、英国、ドイツ他に滞在し、大学等で研究を行っている。第二回目は、1913（大正2）年9月から1914（大正3）年12月帰国までの1年4ヶ月の期間、英国-主として、ケンブリッジ大学Cambridge University-へ再留学している。第二回目の留学の目的は、自身の研鑽と共に、徳川頼貞（1892-1954）（以下、「頼貞」と略す）の英国留学に随行して教育指導を行うことであった（Ⅲ. 1. 参照）。

本節では第二回目の英国留学中の上田を『上田貞次郎日記²⁾ 明治三十八年-大正七年』（以下、『上貞日記』と略す。引用等の当該箇所はノンブルは文中に示す）（本文は日本語・英語・仏語・独語を使用）に基づき、滞在地を中心に、時系列にトレースしてみよう。

(1)

1913年9月3日

新橋駅を出発する。

同年9月24日

シベリア鉄道経由にてロンドンに着く。26日－28日 Beileyes Hotelに宿泊か（徳川頼貞遺稿刊行会 1956:51）。

同年10月5日³⁾

第一回目の留学の際、寄寓した地域（ハムステッド）にある住宅へ室借する。

同年11月18日

Frasgatiにて行われた小泉信三（1888-1966）の送別会[ドイツ転学のため]に出席する。

1914年1月2日

頼貞と共にスイスへ向けて、ロンドンを出発する。

同年1月3日

ローザンヌに到着する。

（11日まで⁴⁾ スイス滞在）

同年1月14日

20 Glisson Road, Cambridgeへ引越す。（頼貞は2月中にセルウィン・カレッジ Selwyn College⁵⁾ の Master's Lodge（当時の Master はマレー John Owen Farquhar Murray (1858-1944)⁶⁾）へ移る（徳川 1943:36）。

同年2月1日

ケンブリッジ大学から研究生 Research Student としての許可の手紙を受け取る。

同年2月18日

大学へ入学する Matriculated⁷⁾。

3月21日

パリへ行く。

フランス滞在中に指導教官ディクソン講師 Goldsworthy Lowes Dickinson (1862-1932)⁸⁾ の紹介でアレヴェ Élie Halévy (1870-1937)⁹⁾ 教授宅を訪問する。

同年4月22日

ロンドンへ戻る。

同年4月24日

ケンブリッジへ帰宅する。

同年6月21日

頼貞と共にパリへ出発する。

同年7月5日

ロンドンへ戻る。

同年7月7日

ケンブリッジに帰宅する。

同年8月23日

第一次世界大戦開戦によりベルリンから英国に退去して来た小泉信三と再会する。

同年11月14日

ロンドンを離れ、帰国（シベリア鉄道経由）の途に着く。

同年12月24日

東京に帰る。

この間、上田は、ケンブリッジ、ロンドンを幾度も離れている。例えば、第一回目留学の際に知己となったヒューズ女史 E. P. Hughes¹⁰⁾ をバリー Barry（南ウエールズ）に訪ねたりして、他出している。

2. 事実調査

本節では『上貞日記』中に記述されている事実をトレースし、彼の行動の一端を認知することを試みたい。様々な事柄が記載されているが、ここでは第一に、滞在地における住居を調査し、行動範囲等を推測してみよう。第二に、上田のケンブリッジ大学入学についての確認調査の結果報告を行いたい。第三に、読書記録から原本（彼が使用したと思われる書籍）に当り、内容を調べてみよう。第四に、ケイ

ンズ（岩波書店編集部（1981：.51）では「ケー
ンズ」と表記している）John Maynard Keynes
（1883-1946）との交友についてみてみよう。

1）1913年10月5日に引越しをした家（15
Glenmore Road, Belsize Park¹¹⁾, London）

この家は第一回目の留学の際に下宿¹²⁾した
経験のあるハムステッド地域にあり、家主はシ
ンプソン夫人Mrs. Simpsonである。

筆者は、2005年6月11日にカムデン区役所
Camden Town Hallへ上記住所の現状を知るた
めに電子メールで質問した。回答（2005年6月
14日付）は次の通りである。

15 Glenmore Road is now split into three
separate dwellings. Flat Ground Floor, Middle
Flat and Top Flat. ...

筆者は各住人（Occupier）に質問の手紙を
送った。しかし、返事はなかった。2005年7月

26日に現地を訪ね、調査を実施した。今回の寄
寓先は、地下鉄Northern LineのBelsize Park駅
から徒歩2－3分の住宅街にある。なお、地
図で見ると、第一回目の留学時、つまり5年前
の下宿先（家主 ホイトン夫人Mrs. Whitton
住所：12 Heath Hurst Road）は駅前通りのハー
ヴーストック ヒルHaverstock Hillを間にして
北方向にあり、新寄寓先と800m－1km位離れ
ている。新寄寓先の建物は、赤レンガ造りで
張り出し窓のついたセミディタッチド・ハウス
（Semidetached house）（写真1）である。玄関
のドアの上部にある扇形の明り取り窓Fan light
および門柱に所番地を示す番号House number
「15」（写真2）が確認できる。三階建て（Second
floor）で、屋根の斜面に屋根窓が切られてい
る。本家屋が建造された時期は不明だが、1910
年頃の外見とほぼ同様とみて差し支えないであ
ろう。

前回の留学の際、ハムステッドが「静かな郊
外」で、交通便（地下鉄）も良いことを述べて



写真1 ロンドンでの寄寓先
向かって右側のドアの家（2005年7月26日 筆者撮影）



写真2 House Number '15'
(2005年7月26日 筆者撮影)

いる。しかも、図書館の利用(*Economist*誌の閲覧等)に便利であることも記している(『上貞日記』p.366)。このような体験から、今回も地理を熟知しているハムステッド付近に居所を構えたのであろう。

なお、Belsize Library(公共図書館)が近くにある(7月30日まで工事中につき閉館であった)。本館は1930年代後半に設立されたので、『上貞日記』中にみられる「Library」ではない。また、「Hampstead Library」は「Hampstead Public Library」を指すのかは現時点では不明である。

2) 1914年1月14日に引っ越した家(20 Glisson Road¹³⁾, Cambridge)

上田は、ロンドンからケンブリッジの上記住所へ移った。建物は、三階建て(Second floor)のレンガ造り(赤ではなくグレーに近い色)で張り出し窓が付されたセミディタッチド・ハウス(写真3)である。歩道から玄



写真3 ケンブリッジでの寄寓先
向かって左側のドアの家(2005年7月23日 筆者撮影)



写真4 House Number '20'

(2005年7月23日 筆者撮影)

関までには段差がある。玄関のドアに明り取り窓があり、所番地を示す番号「20」と獅子頭のノッカーが取り付けられている。右側に押しボタンが見られる(写真4)。なお、地下階については不明である。部分的修繕等は行われたかもしれないが、外見構造は1910年頃とほぼ同様とみて差し支えないであろう。

ここからセルウィン・カレッジまで徒歩で約20分⁽⁴⁾、ケンブリッジ駅(鉄道)まで約10分以内である。頼貞の寄宿しているMaster's Lodgeへも駅(鉄道)にも徒歩圏内である。先および今回の寄寓先は、共に地下鉄・鉄道の駅まで程近い所にあるように見受けた。

この地域は、市の中心部から見ると南東方面である。陸地測量部 Ordnance Survey による、1904年刊行(1901年測量)の地形図⁽⁵⁾(地図1)を見ると当時の町の様子がわかる。ケンブリッジまで鉄道が開通したのは1845年である。1886年測量、1889年刊行の地形図と前述の図とを比較すると、1901年頃の時期においても、依然と

して、町が急速に発展し続け、建物が増加していることが読み取れる。概ね、19世紀最後の15年間の発展は、1886年以前に実施された空き地埋め込みの結果、外方へ拡大されていった。この拡大は、基本的に南東方向であり、北方向はやや少ない(Baggs and Bryan 2002)。

後述するケインズの生家の住所 6 Harvey Road⁽⁶⁾ は、約300m位北西の位置ある。

小泉信三はベルリンから英国に退去して来た後、上田と本寄寓先に同居する。当時(1915年5月)の家屋周辺の様子を小泉(1972: 69)は上田宛手紙に記している。

僕の書斎^[ママ]の窓はライムの新葉に依つて程よく暗い蔭を与えられました。隣の庭から堀越にライラックが咲きこぼれて居ます。林檎の花はもう散りはじめました。二三軒措いて隣の庭の八重桜は何時の間にか葉桜になりました。

なお、小泉の父親、小泉信吉(1849-1894)は旧紀州和歌山藩士であった。上田もⅢ. 1で記すように父親が旧紀州和歌山藩の儒学者であった。この縁で両者は知己となり、頼貞の後任の教育係りとして上田は小泉を推薦した。後任として小泉に決めた時期は1914年4月頃であろう(上田貞次郎 1975b: 16)。

3) ケンブリッジ大学入学についての調査

既述のように『上貞日記』によると、1914年2月1日にケンブリッジ大学から研究生としての許可の手紙を受け取り、同年2月18日に大学へ入学した旨の記述がみられる(p.441, p.443)。

筆者は、大学側の史料から確認を得るため、上田の学生記録 Student records の調査を University Archives のアーキヴィスト コック女史 Jacky Cox¹⁷⁾ に文書で依頼した(2005年7月26日付、学内便 U. M. S.)。返事を学内便にて受け取った(2005年7月29日付)。

返事の手簡に、“I can confirm that one Teijiro Uyeda matriculated on 18 February 1914, having been admitted to a course of research study. He was a Non-collegiate student”と記載されていた。従って、日記と大学側の記録とが一致したことになる。返事の中に ‘a Non-collegiate student’ と記されている。これは、19世紀後半に、学費 College fees を回避し、安価な費用で学べるようにとの考慮から登場したシステムで、カレッジに所属していない学生である。

在籍期間および学位の取得に関する記載はアーカイヴに残されていないとの返事である。上田は、2月1日付け日記に自分の「研究主題として G. L. ディクソン先生の個人指導 (Supervision) のもとに、政府機能についてのイギリス理論および国民の経済生活への応用」

を学ぶことを記している(『上貞日記』 p.441)。しかし、このような記録もアーカイヴに残されていない。

4) 読書記録の調査

第二回留学中、上田は政治学、経済学、歴史をはじめ、諸分野の書籍・雑誌を読んでいる。例えば、“Masterman’s Condition of England” (p.436), “Sir Roland Wilson: The Province of State. Green: Short History of English People : pp.735-844. Sidgwick: Elements of Politics. Chap. 1, 4, 10, 9, 30” (p.442), “Hobhouse – Liberalism, Hobson – The Crisis of Liberalism” (p.449) 等の著者・書名が見出される。

ここでは日記中の読書記録から原本(彼が使用したと思われる書籍)を検索し、内容を調べてみたい。

2月17日 “After tea: Pollard’s History of England – Chap. II and III. 1066 – 1485” (p.443)
2月20日 “Went to University Library. Read Pollard’s History of England – Chap. IV & V” の記事からおそらく本書が(ケンブリッジ大学)中央図書館所蔵本であろうと筆者は推測した。

中央図書館のオンライン目録(Newton)は1977年以降に刊行された出版物について検索が可能である。しかし、本書は1913年(上田の留学時)以前に出版されていなければならない。従って、目録室に設置されている Old Catalogues の内のひとつ ‘The Pre – 1978 General Catalogue’ (目録規則 AACR を適用)を使用し、探索を行なった。責任表示(著者)が不確実であるように見えたが、「Pollard」(著者の姓と仮定)を手掛りに調査を始めた。その結果、「POLL – POLY[の部](44)」に ‘Pollard (Albert Frederick)/The History of England from

the Accession of Edward VI. To the Death of Elizabeth (1547-1603). (The Political History of England. VI)/22cm. London. 1910' の書誌情報を見出した。請求記号に基づき書架から本書を取り出し、点検した。図書館への受入れは、受入れスタンプから「1910年」と確定できた。筆者の推察では、上田は本書を中央図書館から借り出し、読書をしたと想像している。

本書はシリーズ「The Political History of England 全12冊」の内、第六巻目である。著者ポラード A. F. Pollard (1869-1948)¹⁸⁾ によって著述され、1910年に刊行された。同年に図書館に収蔵(納本か)された。本書は英国に関する歴史書であり、当時としては新刊の部類に属するものであったように思える。24章から構成され、テューダー朝(摂政政治からエリザベス一世の没年までについて)の歴史が記されている。II-IV章の章見出し、ノンブルは次の通りである。

II章: A Year of Troubles (p.25-p.46)

III章: Somerset and Warwick (p.47-65)

IV章: The Protestant Reformation (p.66-p.79)

V章: Northumberland's Conspiracy (p.80-p.93)

日記のデータによると、17日には、お茶の後に第2・3章41頁分を読み、20日には、図書館で第4・5章28頁分を読みこなしたことになる。

5) J.M. ケインズとの交友

上田は、ケインズとの交際のひとこまとして『上貞日記』に(1914年)“Feb. 25 Mr. Keynes dinner”と記している(p.445)。また、次のように小泉(1968:225)はケンブリッジにおける上田とケインズとの交流を回想している。

ただ当時私がケンブリッジで同宿していた

上田貞次郎君(後の東京商大学長)が、よくキングスのケインズの部屋に話しにいていたので、講義の終わったあと、進んで挨拶をし、しばらく立ち話をした。

上田とケインズとの交際を傍証する手紙等の手がかりを今回、筆者は見出すことができなかった。

ケインズはケンブリッジ大学キングス・カレッジの出身で1913年から1914年までの期間(年齢30-31歳)、ケンブリッジ大学の経済学レクチャー(1908-1915年)、キングス・カレッジのフェロー(1909-1946年)、『エコノミック・ジャーナル *Economic Journal*』編集者ならびにロイヤル・エコノミック・ソサアティ¹⁹⁾事務長の仕事をこなしていた(ケインズ, M 1978: xiii)。このような彼の活動ぶりを、「一九一〇-一九一二年および一九一三-一九一四年の二年間の彼の時刻表を挙げておこう。この二年間が最も多忙な年であったが、他の年もそれに劣らず多忙であった」とハロッド(1987:170)は描写している。

この最も多忙な時期に上田はケインズを訪問し、話し合っていたことになる。

ケインズの生家は、II. 2. 2)でふれたように上田の寄寓先の付近でハーヴェイ・ロード6番地にある。ヒルズ・ロード Hills Roadから入って、右側にドア横脇に小さなプラーク(写真5)を付した建物が目に入る。グレーのレンガ造り三階建て(Second floor)のセミディタッチド・ハウス(写真6)である。スキデルスキー Robert Skidelsky (1939-) (1987:81)は生家を次のように描写している。

この家は、キース・カレッジ (Caius



写真5 ケインズの旧居を示すプラーク

(2005年7月28日 筆者撮影)



写真6 ケインズの旧居

プラークがドア左側の呼鈴の下に見られる。

(2005年7月28日 筆者撮影)

College) の所有地に建てられた若い既婚の研究員のための住宅のうちの一軒で、当時[1880年代]そこは町はずれであった。... 後になってベランダが増築された。

弟のジェフリー・ケインズ Geoffrey Keynes (1887-1982) (ケインズ, J. 1978: 42) は生家をつぎのように述べている。

新婚早々[筆者注：両親の結婚は1882年]の
両親はケンブリッジの町はずれの新築の
セミ・デイトツチト
二軒続き家に居を構えていた。

1910年代の外見と現状とはほぼ同様とみて差し支えないであろう。

なお、経済学者・書誌学者であるフォックスウエル Herbert Somerton Foxwell (1849-1936) は、結婚(1898年)後、ハーヴェ・ロードのケインズの生家の二、三軒隣に住んでいた(Legg 1949: 293)。『上貞日記』の1914年2月4日の項に“Tea at Mr. Foxwell's”と記されている。この人物がH. S. フォックスウエルと同一人物かは不明である。

Ⅲ ケンブリッジ大学への留学の契機および留学(研究)体験の成果

1. ケンブリッジ大学への留学の契機

本節では、上田がケンブリッジ大学を第二回目の留学先として選択した理由について調べてみよう。

留学目的は、上田自身の研究(財政学)と共に、Ⅱ. 1で述べたように旧紀州和歌山藩の旧領主 徳川頼倫(1872-1925)の長子頼貞の洋行に際しての教育指導の任があった。

自身の研究について妻への手紙(上田 1975b: 11)で、次のように記している。

前の洋行の時は学校から命ぜられた事を研究しようとしたために自分の好きな事を見合わせる傾向だったが、今度は全く自分本位にして居る。

さらに、研究の具体的な内容について『上貞

日記』(p.449)で次のように述べている。

此学期は政治思想史の大体を見ることに力を注いだが、追ては英国の個人主義の発達を究め夫から社会政策上の施設を見ようと思ふ。個人主義の成達は十七世紀まで遡らなければ本当でないと思ふ。社会政策は貧民法、教育法、健康法、工場法、職工組合法、老年年金制度、土地問題、国民保険に亘る筈だ。制度の細かいことは余の研究の目的でない。大方針の立て方と政治思想、倫理思想との関係がみたいのだ。

一方、頼貞は1913年2月、弟の徳川 治が落馬により急逝したことでショックを受けた。回復させようとする配慮から両親が英国留学を勧めた(徳川頼貞遺稿刊行会 1956: 44)。頼貞は英国留学について、帰国後に記した随筆(徳川 1943: 35-36)のなかで、次のように回想している。

倫敦に留学して私が希望したのは、音楽を勉強しようといふことであった。技術家になるのではなくて、音楽理論、或は音楽学を研究したいといふことであった。それで色々先輩に相談した結果、前に述べた二つの学校は技術方面を主としたものであるから、理論方面で優れた名声を持つケンブリッジ大学がよからうといふ多数の意見に従って、一九一四年の始め、ケンブリッジ大学入学を志願した²⁰⁾。

頼貞の留学に際し、上田の父親 上田 章(-1881)(通称 専太郎、安井息軒の塾生、昌平黉で学ぶ)が旧紀州和歌山藩の儒学者であっ

た関係から、上田は頼貞の英国留学に教育係りとして随行することになった（上田 1940：4-6，上田 1980：107-108）。

上田は英国に着いた当初、留学先をケンブリッジ大学かオックスフォード大学か決めかねていた（上田 1975a：p.16）²¹⁾。ヒューズ女史をバリーに尋ねて、頼貞の留学について相談している（上田 1975a：16，上田 1975b：9）。頼貞のケンブリッジ行の一因としてヒューズ女史の意見が作用していると考えられる。

2. 留学（研究）体験の成果

第二回目の英国留学は、上田の経済思想（思考）形成にとりターニング・ポイントとなったのではなかろうか。筆者は背景にある三つの要因を推測している。第一に、Ⅲ. 1. で既述したように、「今度は全く自分本位」、「大方針の立て方と政治思想、倫理思想との関係がみたいのだ」という思考法に上田は立脚している。学問に対する志の高さが、内的背景として存在している。第二に、留学中、ケインズ、ウェッブ夫妻 Sidney James Webb (1859-1947) Beatrice Webb (1858-1943)、ディクソン先生、アレヴェ教授等の後年にキーパーソンとして大成した人物も含め社会・人文科学界の重鎮を上田は訪問し、討論・会談した。このことは同時代の思潮をいち早く理解する機会を得たことになる。この経験は、彼のその後の思想形成に多大な影響をあたえた。第三に、第一次世界大戦が開戦（1914年）し、歴史そのものの大転回が起こった。社会構造の変革は上田の意識に作用したであろう。

上記のような諸要因により、上田の思考方法（経済思想）は第二回目の英国留学の前後では変化した。つまり、留学体験（研究）の成果が

認められる。

このような状況を裏付けている三人の研究者の文章を次に紹介してみたい。

東京商科大学（現、一橋大学）時代、上田ゼミナールの学生の一人であった経済学者 猪谷善一（1899-1980）（1923年卒業）は上田著『英国産業革命史論』（講談社学術文庫）の解説（1979：196）の中で次のように述べている。

イギリスで見聞した第一次大戦の戦時経済政策は大正四年に『戦時経済講和』として出版されたが帰朝後の学問的興味は財政学に向けられず、主として社会思想の研究に向った。特にギルド・ソシアリズムの研究や産業管理問題に向けられ、広い意味のイギリス産業革命の研究に集中しつつあった。

さらに、別の書物で猪谷（1976：530）は次のように記している。

産業革命史は比較経済史的テーマとして先生の胸中にあった。しかしその発想は第一次大戦から帰朝した先生の脳中に醸成したのであり、留学出発以前の先生の著作には遺憾ながら見出し得ない。

同じく東京商科大学時代のゼミ生であった経済学者 山中篤太郎（1901-1981）（1925年卒業）（1965：474）は次のように書き表している。

二回の留学に際して、アッシュレーによって端緒に開かれつつあった歴史的経済分析、ウェッブ夫妻の社会主義的実証的資本主義分析法、によってうちに潜んでい

た上田的「方法」がいわば点火され、引出された業績ともいべきもの、いいかえれば、理論的より実際のしたがつて歴史的、研究者的静観より改良家的行動、を特色とする研究の凝集、がこの時期に公にされている。論文集『社会改造と企業』(大正十一年)『英国産業革命史』(大正十二年)^(ママ)を中心とする研究がこれである。(筆者下線)

引用文中の「改良家的行動」はデイクソン先生の思想に見られる「実践的応用」(注8)参照)と符合するものではなかろうか。

西沢 保(1950-) (2001:152)は第二回の留学を日英関係史研究の視座から検討し、次のように述べている。

その後二回目の英国留学をし、第一次世界大戦、ロシア革命を経て日本でも社会問題・労働問題、社会主義思想が急速に成長する中で、「社会改造の理論と企業家の位置」(一九二〇年)、『社会改造と企業』(一九二二年)、『英国産業革命史論』(一九二三年)などを公刊し、資本主義社会における企業者・経営者職分の意義を強調した。とくに大正中期以降の学問に明白に現れてきたように、「現実」の日本経済の中に立って社会経済的な「問題」を取り出し、これを「考える」ところに研究が方向づけられた。

筆者の今後の課題として、上記の諸見解について、丹念に検証、検討を加えて次回に発表を試みたい。

本稿を作成するにあたり、細谷新治一橋大学名誉教授およびセルウィン・カレッジ マスター Richard Bowring教授は貴重な資料をお貸し下さった。ケンブリッジ大学中央図書館日本部長 小山騰氏は有益なご助言を与えて下さった。以上の方々に厚くお礼申し上げる。

注

- 1) 源 昌久 2003. J. M. D. メイクルジョン (1830-1902) 著『比較新地理学』に関する一考察—明治地理学史の一節。源 昌久『近代日本における地理学の一潮流』202-222. 学文社。源 昌久 2003. 日本の大学における J. M. D. Meiklejohn 著 *A New Geography* の所蔵調査。源 昌久『近代日本における地理学の一潮流』223-233. 学文社。

- 2) 書誌事項は次の通りである。

上田貞次郎日記 上田貞次郎著

東京、慶応通信 1963年4月—1965年5月
3巻;19cm

第1巻:明治35年—37年(青年篇)

1965年5月.—620p.

注)写真、跋あり。

第2巻:明治38年—大正7年(壮年篇)

1964年4月.—574p.

注)写真、跋文あり。

第3巻:大正8年—昭和15年

1963年4月.—397p.

注)上田貞次郎年譜、写真あり。

- 3) この日付「10月5日」は『上貞日記』p.435を参照した。上田(1975a:15-16)によると、「10月12日」付手紙中に、「僕は五年前に居たことのあるハムステッドに室借した。自分の室が出来てから今日で三日目だ」と記されている。引越しの日付を逆算すると「10月10日」となる。

- 4) この日付「11日」は『上貞日記』p.441を参照した。上田(1975b:10)によると、「1月12日」付手紙中に、「一昨日帰英、兩三日中にケンブリヂへ移転のはづなり」と記されている。滞在最終日を逆算すると、「9日ないし10日」になる。
- 5) セルウィン・カレッジは英国国教会の思想(自由主義的思考)に基づき、George Augustus Selwyn (1809-1878)(ニュージールランドの主席主教(1841-1868), リッチフィールドRichfieldの主教(1868-1878)を歴任)を記念して、1882年、英国国教会の聖職者養成学校として設立された。教会の信条に従い、若者をシンプルかつ宗教的慣習の下で教育を施していた。しかも、学生は他の古くからあるカレッジと比較すると低額な授業料(一学期 £27)で済んだ(Brock and Cooper 1994:1)。当初、'Selwyn Hostel'(Hostelとは学部学生の宿舎と大学の正式なカレッジ(Full collegiate status)との中間的役割をはたすもの)として許可された。Leedham-Green(1996:244)は、19世紀において、'hostels'あるいは'house'の語はセルウィンのような伝統的と言うよりも格式ばらないカレッジでは'institutions'の意味で使われていたと記している。1958年、正式なカレッジとして認められた。1976年10月から女子学生の入学を許可した(Brock and Cooper 1994:266)。2004年10月から2005年6月の期間の学部(Undergraduates full time)在学学生数は、男:223名、女:161名 計384名である。大学院生(Postgraduates)数は、Full time 男:64名、女:43名 計107名、Non full time 男:29名、女16名 計45名である(University of Cambridge 2005)。
- 6) 頼貞がMurrayの家庭(Master's Lodge)に寄寓することになったのは、「上田博士の尽力」のお蔭であった(徳川頼貞遺稿刊行会 1956:76)。Murrayと上田とが面識を持つ契機は現時点では不明である。Murrayはマスター職を1909年-1928年の期間、務めた(Brock and Cooper 1994:349)。Murrayが退任する頃(1928年)、彼のカレッジ運営の手腕にたいする評価として、彼が仕事を十分に遂行していなかったと苦情を言う教員達もいたが、カレッジの状況は祝福を呈すべきものであった。武の面では、ボート、ラグビー、サッカーで優れた記録を残した。文の面でも、優等卒業試験(Tripes examinations)で優れた成績を残す学生がいた。(Brock and Cooper 1994:163-164)。彼の妻、Mrs. Murrayは才能のある人物で学部学生にたいして物質的・精神的に支えとなった(Brock and Cooper 1994:145)。なお、Murrayが写っている写真が『上貞日記』p.430とp.431との間にある。キャプションに「第二回留学当時... (大正3年)」と記されている。座って書物を持っている人物がMurrayである。Brock and Cooper (1994:136)の写真"The Master, and Scholars in 1910"のキャプションから判明した。
- 7) Matriculateの意味は「ケンブリッジ大学あるいはカレッジのメンバーとして名簿に記載される(Enroll)かないしは登録されること」である(Stubblings 1995:75)。
- 8) ディクソンは英国の人道主義者、歴史学者、哲学的な著述家である。キングス・カレッジ出身者。ケンブリッジ大学の講師(The post of lecturer in political science)。彼は人道主義に基づく実践的応用に重きを置き

- ていた。上田がケンブリッジ大学で指導を受けていた頃の彼の行動をみてみよう。1912年、旅行用特別奨学金を得て、インド、中国、日本を遊歴した。1914年、第一次世界大戦の勃発に際し、直ちに彼は将来起こりうる戦争を防ぐため実践的行動に自身を投じた。国際連盟‘League of Nations’（彼が考案したと思われる語句）の計画案を作り、成立に指導的役割を果たした。なお、フライ Roger Fry (1866-1934) によるディクソンの肖像画の一つは、キングス・カレッジのホールに掛けられている (Legg 1949: 225-227)。
- 9) アレヴェはフランスの英国史家・哲学者。アレヴェの『19世紀イギリス国民史』（原タイトル: *Histoire du peuple anglais au XIX^e siècle*）(1912-1947, 全6巻)（英語タイトル: *A History of the English People in the Nineteenth Century*）は、近代英国社会史に最も影響をあたえた書物のひとつであると述べられている (Pavlovski 2001: 105)。下中 (1987: 208) は本書について「外国人の手になるものではあるが、本国の歴史家を含めて、19世紀史に関しては質量ともに最も高く評価されているすぐれた概説である」と記している。
- 10) ヒューズ女史は、「ケンブリッジの第一回女性卒業生で当時[1906年]はバリーで女子中等学校の校長」をし、来日した経験を持つ人物である (上田 1980: 89)。上田は、自著『白雲去来』に収録している「英国の赤十字」中でヒューズ女史を採り上げ、記している (上田 1940: 257-259)。
- 11) 渡辺 (1998: 50) によると、「ベルサイズはBelassis「美しい位置にある」が訛ったもの」と記されている。
- 12) 『上貞日記』(p.365-p.373) によると下宿期間は1908年8月から同年10月までの2ヶ月間である。
- 13) Glisson Roadは、英国の医学者（解剖・生理・病理）であったFrancis Glisson (1597-1677) (Caisus出身) に由来して、名付けられた。グリッソンは、ケンブリッジ大学教授であり、くる病についての古典的記述を発表 (1650年) し、肝の構造についても研究 (1654年) した (南山堂 1954: 526)。なお、道路名は、19世紀にはしばしば人名が付けられていた。それ以前には、通常、そこで商売されている品物に拠っていた (Gray and Stubbings 2000: viii, 38)。
- 14) 筆者が試みた道順は次の通りである。20 Glisson Road → Hills Road → Lensfield Road → Trumpington Street → Silver Street → Sidgwick Avenue → Grange Road → Selwyn Collegeの敷地内にあるMaster's Lodgeまで。
- 15) 陸地測量部による‘Cambridge area’の地図作成において、6インチ縮尺図OS 6” Map (1マイルの距離を6インチで示すつまり縮尺1: 63,360) がはじめて刊行されたのは1889年 (測量1886年) である。1904年刊行の地形図はその改訂版である (Baggs and Bryan 2002)。
- 16) Harvey Roadは英国の医者・生理学者であったWilliam Harvey (1578-1657) (Caisus出身) に由来して、名付けられた (Gray and Stubbings 2000: 38)。ハロッドHarrod (1967: 212, 222) により指摘された「ハーヴェイ・ロードの前提 (Presumption of Harvey Road)」は、この道路名に拠っている。
- 17) コック女史は以前、King's College Library, Cambridge UniversityのModern Archive Centreのアーキビストであった。ケインズ研究

者は彼女のアドバイスを受けていた。当時の様子は北條（1998：145-146）、那須（1999：124, 129, 131）等によって描かれている。筆者は、Cox女史を滞英中、ケンブリッジ大学中央図書館の食堂で見かけたが、挨拶の機を逸した。

18) ポラードは英国の歴史学者。1887年、オックスフォード大学Jesus Collegeに奨学生として進学した。1891年、近代史の分野で優等卒業学位の第一級を受けた。1903年、ロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジUniversity College, Londonの歴史担当の教師となる（1931年まで）。1906年、歴史学会The Historical Associationを創設し、1912年－1915年には会長を務めた。彼は平俗なレベルなもの、テューダー朝の前後時代、現代史についても多数の著作はあるが、テューダー朝が主分野である（Legg and William 1959）。

19) The Royal Economic Society (RES) はThe British Economic Associationとして1890年に設立され、1902年に勅許を得てRESとなった。設立の目的は、経済学研究の振興と英国内における経済誌の刊行という特別な目標を有していた（http://www.lse.ac.uk/library/archive/gutoho/royal_economic_society.htm [2005/11/14]）。

20) 頼貞はケンブリッジ大学入学を当初、計画していたが、後に入学を断念した。『上貞日記』（p.489）によると「頼貞君の入学希望は中止になったが、…」と記されているが、明確な理由は述べられていない。上田が妻へ送った手紙（1914年5月25日付）中で、上田（[1975]：8）は「頼貞様は大学入学といふ事に就ては試験が六かしいので、とうとう中止にしてしまわれたが、英語と音楽は中々御勉

強だ」と述べている。

21) 第一回目の留学時にバーミンガム大学を離れる際、新留学先としてケンブリッジ大学を候補として上田は勘案していた。理由として「Dr. Cunninghamの歴史を少し聴いてみたいからである」および「Economic Tripesを持つて居る事及びDr. Cunninghamのゐる事の利益がある」をあげている。（『上貞日記』p.126）。

文 献

- 猪谷善一 1976. 解説. 上田貞次郎著『上田貞次郎全集 第3巻 産業革命』515-538. 上田貞次郎全集刊行会.
- 猪谷善一 1979. 解説. 上田貞次郎著『英国産業革命史論』193-210. 講談社（講談社学術文庫）.
- 岩波書店編集部 1981. 『岩波西洋人名辞典』（増補版）岩波書店.
- 上田正一 1980. 『上田貞次郎伝』泰文館.
- 上田貞次郎 1940. 『白雲去来』中央公論社.
- 上田貞次郎 1975a. てい子への書簡－その1. 『上田貞次郎全集の葉』3：9-16.
- 上田貞次郎 1975b. てい子への書簡－その2. 『上田貞次郎全集の葉』4：6-16.
- 上田貞次郎 [1975]. てい子への書簡－その3. 『上田貞次郎全集の葉』5：6-16.
- 小泉信三 1968. 『私の敬愛する人びと』角川書店（角川選書）.
- 小泉信三 1972. 『小泉信三全集 第25巻上』文藝春秋.
- ケインズ, J. 1978. 幼年時代のケインズ. ケインズ, M. 編, 佐伯 彰, 早坂 忠訳『ケインズ 人・学問・活動』42-55. 東洋経済新報社.

- ケインズ, M. 編, 佐伯 彰, 早坂 忠 訳
1978.『ケインズ 人・学問・活動』東洋経済新報社.
- 下中直也 1987.『世界名著大事典 5』(オリジナル新版)平凡社.
- スキデルスキー, R. 著, 宮崎義一監訳, 古屋隆訳 1987.『ジョン・メイナード・ケインズ I 裏切られた期待 1883-1920』東洋経済新報社.
- 徳川頼貞 1943.『薈庭楽話』春陽堂書店.
- 徳川頼貞遺稿刊行会 1956.『頼貞随筆』河出書房.
- 那須正彦 1999. ケンブリッジ遊学報告ー“アーカイヴ”におけるケインズ研究. 明海大学経済学論集11(1):124-134.
- 南山堂 1954.『南山堂医学辞典』南山堂.
- 西沢 保. 上田貞次郎の新自由主義・日本経済論. 都築忠平, ダニエルズ, G. 草光俊雄編 2001.『日英交流史1600-2000 5 社会・文化』150-165. 東京大学出版会.
- ハロッド, D.F. 著, 塩野谷九十九訳 1987.『ケインズ伝 上巻』(改訂版)東洋経済新報社.
- 北條文緒 1998. ブルームズベリーふたたび下. みすず 447:130-149.
- 山中篤太郎 1965. 上田貞次郎先生ー一つの評伝. 一橋論叢 53:463-480.
- 渡辺和幸 1998.『ロンドン地名由来事典』鷹書房弓プレス.
- Brock, W. R. and Cooper, P. H. M. 1994. *Selwyn College A History*. Durham: Pentland Press.
- Baggs, T. and Bryan, P. 2002: *Cambridge 1574-1904*. Cambridge: Cambridgeshire Records Society.
- Gray, R. and Strubbings, D. 2000: *Cambridge Street-Names: Their Origins and Associations*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Leedham-Green, E. 1996. *A Concise History of the University of Cambridge*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Legg, L. G. W. 1949. *The Dictionary of National Biography 1931-1940*. London: Oxford Univ. Press.
- Legg, L. G. W. and Williams, E. T. 1959. *The Dictionary of National Biography 1941-1950*. London: Oxford Univ. Press.
- Pavlovski, L. 2001. Élie Halévy 1870-1937. Pavlovski, L. ed. *Twentieth-Century Literary Criticism 104*. 105-145. Detroit, Miss.: Gale Research.
- Stubblings, F. 1995. *Bedders, Bulldogs & Bedells: A Cambridge Glossary*. Rev. and enl. ed. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- University of Cambridge 2005. *Cambridge University Reporter 135 (Special 19)* Cambridge: Cambridge Univ. Press.

Research Note

Teijiro Uyeda: Second Academic Sojourn in Britain as Turning Point in His Ideas on Economy

Shokyu Minamoto

Teijiro Uyeda (1879-1940) was an economist who served as president of Tokyo University of Commerce (now Hitotsubashi University) from 1936 to 1940. This study examines the effects of his second academic sojourn in Britain (September 1913-December 1914) on the evolution of his economic thought. First, drawing on his diary (written in Japanese, English, French and German), I gathered information about his stay in London and Cambridge: field research in both places; his admission to the University of Cambridge based on examination of documents in the University Archives; search for the books he recorded in his diary as having read and identification of an actual library volume he read; and study of his contacts with John Maynard Keynes. Second, I researched and analyzed the reasons Uyeda chose the University of Cambridge as his place of study. Third, citing the writings of economists, I demonstrate that the sojourn became a turning point in the evolution of his ideas on economy.

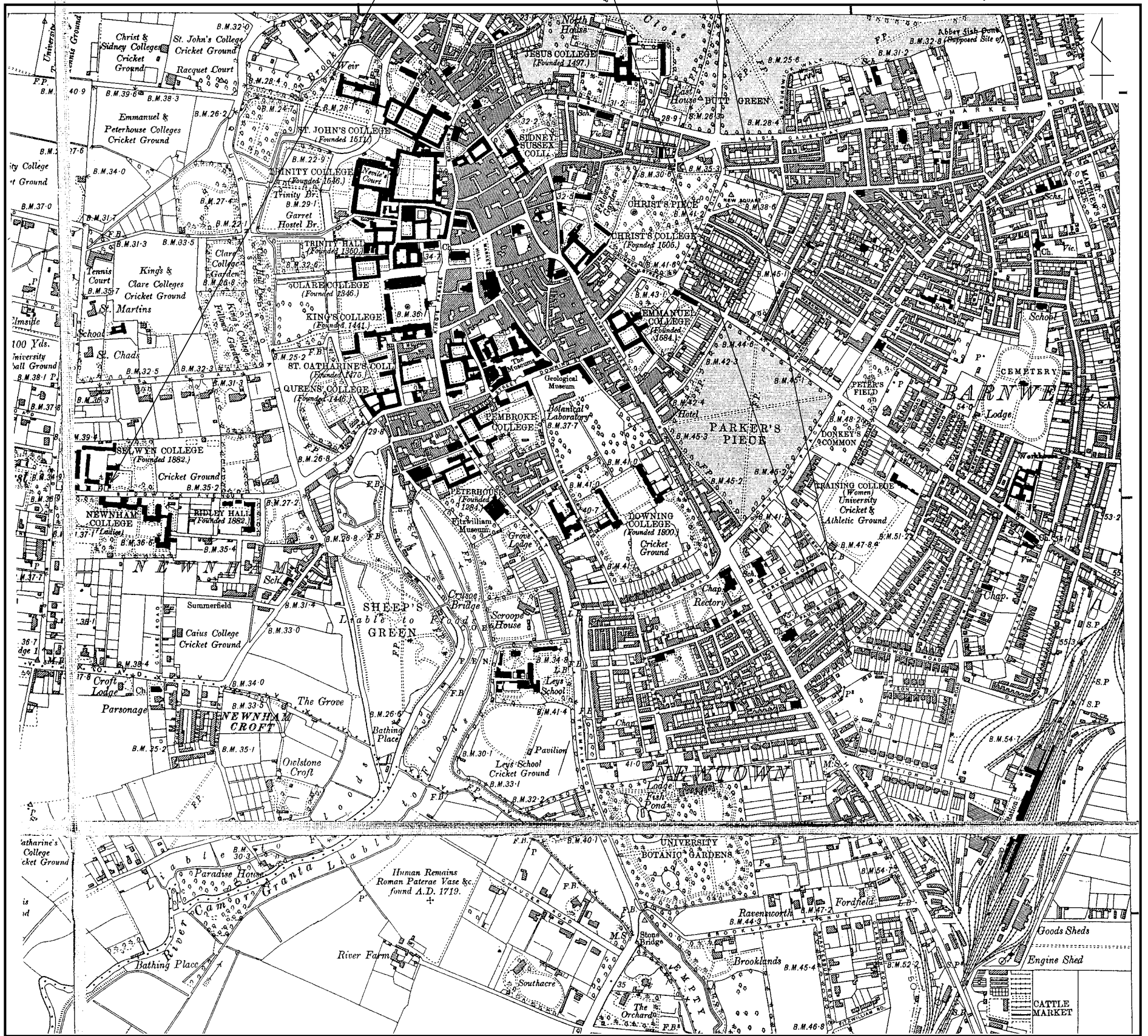
3RD EDITION, 1904.
EARLY & MUNL. BORO.
XL. S.W.

セルウィン・カレッジ (Master's Lodge)

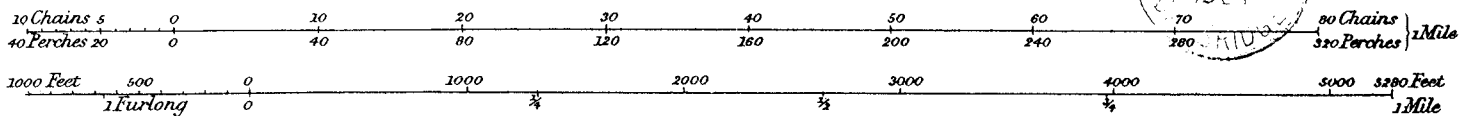
ケインズ旧居

上田寄寓先

CAMBRIDGESHIRE. SHEET XLVII. N. W.
MIDSUMMER COMMON
LON. 0° 8' E. RIVER CAM
Towing Path



Scale — Six Inches to One Statute Mile or 880 Feet to One Inch — 10380



地図1 上田寄寓先, セルウィン・カレッジ (Master's Lodge), ケインズ旧居の位置関係

陸地測量部作成 Cambridgeshire, Sheet XLVII. N. W. (1904年刊行) (縮尺 1:63,360) (ケンブリッジ大学中央図書館地図室所蔵) の一部に加筆.